神騙り

絢無晴蘿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神騙り

【Ｎコード】
Ｎ３８１３ＢＡ

【作者名】
絢無晴蘿

【あらすじ】
この世界は、歪んでいる。

風の舞姫が出会うのは、
セイを騙る死者、
未来を語る占者、
一族を騙る錬金術師、
存在を騙る巫女、
本心を語る陰陽師、

そして、すべてを騙る暗殺者？

これは、守れなかったモノ達の物騙……

「なんて、意味深なこと言ってるけど、ぶっちゃけうちらが事件に巻き込まれたり、解決したり、振り回されたりするはなしです」

「え、あらすじ、うそなの？！」

「う、嘘じゃないよ！」

みたいな感じで、主人公がまったく活躍しない物語の始まりはじまり！

始まりの物語

永久と言われた神世は終わり
狂い狂って五千年
既に現は人の世と為る
愁いな年月巡り廻って
神の定めた運命は
全て歪に歪んでく

剣と魔法の世界
フィーア

その世界で語られるのは
枉げられた事実
そして騙られるのは
壊れ果てた真実
そんな終わりの始まりの
モノガタリ

名を言ってなかったわね
私の名は、シェルリーズ
この世界、フィーアの案内人

さて、悪夢から目覚めた王は
何を視る？

そして
何を選ぶ？

これは、もう始まってしまっていた物語……

これは、もう終わってしまっていた物騙……

だとしても、僕は、騙り続けるよ
アルト……

始まりの物語（後書き）

超長編小説となります。
よければ、お付き合いください。

００－０１－００　プロローグ　Ｍｓｉｄｅ

「どういう事なんですかっ！！」

ドアを蹴破る勢いで、いや、蹴破ってメガネをかけた青年が部屋に入ってきた。
その部屋には中央に接客用のソファと机が置かれ、脇には本や資料がところせましと詰め込まれた本棚が置かれ、南側の壁には、青年が入ってきた物とは別の扉があった。
ここは皇館。星原のエース代理、クイーンの私部屋であり、接客にも使われている部屋である。
その部屋にいたのは、ソファに堂々と座るこの部屋の主。
金髪碧眼の少女、クイーンであるラピス・カリオン。
そしてもう一人……露草色の瞳のまだ幼さの残る少年。
「来てくれてうれしいわ。とりあえず、どうもこうも、こういう事だけど」
目の前に座る少年を指さして困ったように言う。
「陸夜さんに言いますよ」
青年は半眼でぼそりと小さく言った。
「……ぅ、そ、それについてはもう手は打ってあるわ」
動揺は一瞬で、ラピスはまっすぐと青年を見る。
「残念ながら、陸夜には少し遠くに行ってもらったから。カリスとアイリスの式神でも連絡するのに、二・三日はかかるでしょうね」
「なっ！」
タイムリミットは後四日。

それまでに何とかしなければいけないと言うのに、陸夜を呼ぶだけで二・三日では、絶対に間に合わない。
「私だって、こんな事やりたくなかったのよ。でも、メルに正式な依頼として出されちゃったから、受けるしかなくって……」
「だからって、なんでこの馬鹿の為にマコトが命を賭けなくちゃいけないんですか！！」
青年の指さす先には、黙ったままの少年。
「まったくです」
と、部屋に居る三人以外の声が聞こえる。
声の主はどう見ても部屋の中に居る筈なのだが、居ない。
しかし三人はそれに動じず、まるで誰かが居るかのようにごく自然に受け止める。
「何故、我があるじがこんな馬鹿の為に」
その言葉が終るか終らないかのうちに部屋にはいなかったはずの四人目が現れた。
光を反射するのか、揺れるたびに色が変わる不思議な光沢の長い銀髪に、その髪色と同じ瞳。
人外の美しさを持つ少女。
まるで最初からそこにいたように、ラピスの座るソファの後ろに立っていた。
「お、俺だって、好きでこんな事しているわけじゃないんだけど……」
露草色の瞳を持つ少年が、ため息をつきながら言った。
「いっそのこと、あのまま消滅してメル様が王に即位すればよかったと思います」
ようやく口を開いた少年に、少女は容赦なく言葉で叩きのめす。
「ヒドっ！！」
「……分かりました。この依頼、受けてやりますよ」
青年が笑いながら言った。
「あの、目が笑って無いんですけど……」

「私も、行きます」
少年の声を無視して、少女も決意を秘めた声で言った。
「そう。ありがと。場所なんだけど、たぶん大和国のこの地域」
脇に置いてあった地図を広げて目的地を指す。
「……白峰の地？　いや、ここは常盤の森ですか？　確か、小さな村があったはずですよね」
青年の問いに、ラピスは頷いた。
「翠螺の村……土地神を祭る、小さな村よ」

「待って」
少年と少女が部屋を出て、それに続こうとした青年をラピスは呼びとめた。
「なんですか？」
「……この件かどうかは分からないけど、音川の姫が翠螺に乗り出したそうよ」
「おと……かわ？」
「シルフの娘が」
「え」
真っ青になった青年は、ただ茫然と呟く。
「それは……いろいろ不味いかもしれない」

00―01―00　プロローグ　Aside

「くっしゅん！！」
「噂か？」

常盤の森、翠螺の村へと続く道を歩く旅人らしき人が二人。
先頭を歩くのは十五・六歳程の少女。何故か巫女装束で、手荷物はなし。
大和国では珍しい栗色の髪をポニーテールに結んでいる。
しかし、何より印象的なのはその独特の瞳だった。
一度見たら忘れないような黄色みがかった鮮やかな赤。
そんな少女は着の身着のままでのほほんと歩いている。
その後ろに続くのは、少女よりも年上のような少年。
少女とは対照的で、旅人の着るような着物に荷物。
腰には古そうな剣。黒髪黒眼の大和国では標準的な容姿。
そんな二人の旅人は、一人っ子一人いない道を歩いていた。
「ちょっとはり！普通ここは、寒くない？とか、かぜ？とか聞くものじゃないの？」
先ほどのくしゃみはこの少女だった。
「大丈夫。アルトは風邪をひかない類の人だから」
笑いつつ、少年は答えた。
「え、そうなの？！聞いた、らいか！？あるとって、かぜひかないんだって！！」
少女……音川アルトが嬉しそうに話すと、すぐ横に手のひらに乗るサイズの少女が現れる。

真っ赤な中華服に黄色の髪、同色の瞳は呆れてアルトを見ていた。
「いやいや。アルト、ばかにされてるって」
普通に会話しているが、彼女は雷を司る精霊だったりする。
何故精霊が人間と一緒に行動しているのかとかは長くなるので略。
ちなみに、羽やら翼やらはついていないが浮いている。
本人いわく、ああゆうの邪魔なんだよね。との事。
「まったく、馬鹿になんてしてない。事実を言ったまでだよ」
そんな精霊と平然と話す少年は千引玻璃。
アルトの友人だった。
「……一層立ち悪いんだけど」
「え？どゆこと？？」
天然少女と雷の精霊そしてその友人、。
そんな二人、改め三人組が目指すのは翠螺の村。
頭上の遥か彼方で三人を監視する存在に気付く事も無く前を進んでいく。

晴天の空のもと、確実に事件は始まっていた。

「まったく、シルフはなにを考えているの？」
木々の上で、そんな旅人の様子を監視していた精霊は、長い髪をかきあげて呟いた。
彼女の周りで、風が激しく吹く。
「……監視ね」

音川アルトを、睨みつけた。

彼女が、物語の舞台に上がる時はほど遠い。

00―01―01　常盤の地、神隠しの森

1

音川アルトと千引玻璃は翠螺の村に来ていた――
大和国、白峰山の越えた先の『常盤の森』のはずれにその翠螺の村がある。
森は、常盤と言われるだけあって一年を通して緑が絶えない。
また多くの自然がある事から、精霊や妖精、神霊が多く存在し、さらに土地神の加護もあって辺鄙なところながらも意外と大きな村があるとアルトは聞いていた。
そう、聞いていたのに……。

「だれも、いない……？」
木材で作られた家。よく耕された畑。どこの村でもありそうな風景。ただ、言いようのしない違和感が村全体、いや、森も含めてこの場所一体を包んでいた。
……人が居ないのだ。
夜などならともかく、今はまだ朝早く、農業をしている者なら何かしら作業をしていてもおかしくない時間帯だが、本当に誰もいないのだ。
思わず隣にいた玻璃を見た。
「遅かったか……」

アルトと玻璃、この二人が翠螺の村に来た理由、それはアルトに昨日届けられた手紙であった。
その内容とは……

『ヤッホーお母さんです。
なんか常盤のほうが大変な事になってるみたいだから行ってちょ。
原因解明と事件解決お願いね～☆
あ、神隠しですとさ。』

とのことであった。
因みに、半年ぶりに来た手紙の内容である。
ふざけた手紙だが、母からの手紙。
母からの命令である故に、止める兄を振り切って玻璃と共にやって来た。
むしろ、行かなかったら大変なことになる。

「村ぜんたいを巻きこむ神隠しって……」
家の中を見ても誰もいない。
畑には、つい先ほどまでいたかのように鍬や鎌などが置かれたままだ。
「……」
黙って玻璃も違う家の中を見るがやはり、誰も見つからない。
本当に神隠しなの？
もし神隠しだとしても、本当にアルトと玻璃だけで事件解決なんて出来るのだろうか？
それも踏まえて、母は手紙を出してきたのだろうけど、それでも心配だ。
「ねぇ、アルト。ここ、ヤダ。……おかしいよ」
「らいか？」
突然左そでをつかんだらいかが泣きそうな声で行った。
怯えている？
「ここ、『誰』もいない、よ」
「？」

誰もいない。
「あ……っ！！」
言いようのない違和感。それは、人が居ないだけではなかった。
それは……
「精霊も、妖精も、『誰』もいない」
「っ！？」
先ほども言ったが、ここは自然が多く精霊や妖精たちが多く存在している。はずなのに、見渡す限り影すらも見つける事が出来ない。
気付いてしまうとまるで異界の地に来てしまった、そんな感覚が襲ってくる。
『誰』もいない場所が、ここまで空虚だったなんて。
アルトと玻璃、そして雷華しかいないこの場所が、異界のように感じてくる。
「ここで……」
何が起こっているの？
そんな疑問を口にする前に、異変が起こる。
……霧だ。
森から全てを包み込むように霧が、地を這い木々の間から侵食して来たのだ。
カタ。
「なにか、音が……？」
何かが打ち鳴らされる音。
何かがこする音。
何かが草をかき分ける音……？
「アルト、戻って。ここは危険だ、帰った方がいい」
玻璃はアルトを庇うように一歩前に出る。
姿の見えない敵を感じたのだ。
「……いやだよ。あるとは神隠しを止めるために来たんだもん」
玻璃と並んで、抗議の声を上げる。
「それに、アルトには雷華が指一本触れさせないんだから」

バチバチと静電気を発しながら、雷華がアルトと玻璃の間に入った。
「もちろん。オオカミにもね」
「……」
「おおかみ？」
静かに玻璃をにらみつける雷華。それを軽く受け流していると見せて内心冷や汗をかきまくっている玻璃。それを不思議そうに眺めるアルト。
そんな事をしている内にも、音は近づいて来る。
「とにかく、迎え撃ってやるんだから！！」
「いっけーアルト！！　雷華は応援してるー」
「……応援かよ」
若干ため息をついた玻璃は腰にさした剣を抜いた。
「あ、きちんとサポートもやるわよ？　だって、アルトは私の大事な契約者だもん」
雷華の周りに光が集まり少しずつ大きくなる。
「だったら、きちんとアルトを守れよ」
「当たり前でしょ！」

その間にも音は近づき、遂に、音の出どころであるヒトビトが、森から現れた。
森の間から現れたのは……。
「な、なんだ、こいつら！！？」
黄色く黄ばんだ人のようなモノ。それは……。
「……ほ、ほね？」
人体模型のような言葉通り骨だった。
人の骨。
それが、動いている。
原理がわからないが、なぜか動き回っている。
しかも、次々に森から現れる。
それだけでも嫌悪感を催すと言うのに、その骨たちは手に物騒なこ

とこの上ない斧やら鉈やらを持っていだ。
金属と金属がぶつかる音が響いた。
玻璃の剣と骨が振りあげた鎌が打ち合った。
若干戸惑いながらも玻璃は骨たちと拮抗して立ちまわっている。
が、なにしろ数が多い。
そんな玻璃を補助するためにアルトは舞う。

音川の風巫女、風の舞姫、音姫……アルトはそう呼ばれる。
音川家は代々舞を白峰山の土地神、白峰の神に奉納する巫女の一族の一つである。
その始まりは、五千年以上昔とされている由緒正しい家柄だ。
大和国は百年間鎖国が続いていたと言うのに、その噂は世界中に広まっている。
鎖国が解けた後は遠く異国の旅人が、奉納するときにおこなわれる祭りを舞目当てに見に来るほどである。
正確には、舞と歌なのだが、とにかく、アルトはそんな音川家の次期当主であり、音川に伝わる舞を舞う巫女であった。
もちろんただの舞いではない。舞う事で世界に干渉し、魔法のような現象を起こす。

シャラン……と、鈴が軽やかに響く。
アルトの巫女服には幾つかの鈴が隠されているのだ。
「輝きの舞い、華虹烙……」
小さくつぶやくと、顔を上げて一呼吸……舞った途端、世界が一転する。
光がそこかしこから現れた。
シャン、シャン……。
アルトが腕を振るたび、足を動かすたびに鈴の音色が鳴り響く。
それは……美しい舞だった。
蛍のような光がアルトと玻璃を守るように現れては点滅し、薄くな

ってはまた光る、そんな間をアルトは舞い続ける。
少し大技かました方が良いかな……？
そう、アルトは判断する。
「アルトっ！」
「え？」
玻璃の声に気がつくと、いつの間にか後ろに回り込んでいた骨が手の鎌を振りおろそうとしているところだった。
「光矢っ！！」
瞬間にまわりを漂っていた光が矢のように高速で骨を貫き、穿つ。
舞によって創られた光が、次々に骨襲う。
骨が折れ、粉々に散っていく。が、まだ完全に壊れない。
骨は、怒ったように口の部分らしきところを開き吼える。
「ガアあぅゥぁァああアっ！！」
「ちょ、声でるの！？」
骨だけなのに？！
「伏せてっ！」
思わず耳をふさいだアルトの前に躍り出たのはまわりに雷を纏った雷華だった。
「近づくんじゃないわよっっ！！！！」
バッ、と一面に光が広がり、雷がそれこそ華のように骨に降り注いで消えた。
今度こそ、ばらばらになって四散する。
「あ、ありがと。雷華」
「うん」
雷華は嬉しそうに笑って答えた。
「アルト、こんなのにちまちまとやるないで、ばっとやらない？」
「うん。そうだね！！」
そう言うと、柏手を一つ叩く。
そしてもう一回。
「行くよ。神鳴の舞い、雷華！！」

アルトの舞いと共に、雷の華が咲きほころんだ……。

「うっわー。派手にどんぱちやってんなー」

木々の向こうで、霧に包まれてもなお見る事が出来る雷の光に、少年は露草色に瞳を細めると青年に言った。

「そうですね」
淡々と答える青年は、眼鏡を押さえた。
「加勢しなくていいのか？」
腰の剣を叩いて示す。
「そんな状況だと思っているんですか？」
「……えっと、ごめんなさい」
「残りの時間は？」
「……あの、後三日です」
「貴方がやるべきことは？」
「……その、宝珠の奪還です」
では、いきますか。
そう言って、さっさと森を歩き始める青年。
「お、おい！いくらなんでもそれはないだろ、テイル！！」
青年の名はテイル・クージス。
なんでも屋、星原で働く錬金術師兼医師見習いであった。
そして少年の名は、竜王。今回の依頼内容の重要人物。
竜王のせいでこんどの事件が起こってしまったと言う事で、テイルやラピス達には頭が上がらない。
まぁ、因果応報だろうとテイルは考える。
「今のうちに入り込まないと、本当に死にますよ。それに、あの人たちなら大丈夫ですよ。あなたが思っているほど弱くないんですから」
それだけ言うと、さっさと行ってしまう。
「……アルト。来ているのか……」
何とも感慨深い。
もう一度激しい魔術戦が行われていると思われる方を見ると、祈るように目を閉じた。そして目を開くと、前を向いて歩き始めた。
「……」
もう、振り返らなかった。

００―０１―０２　常盤の地、神隠しの森

2

「はっ！！」
最後の骨を玻璃は粉々に砕いた。
「これで、おわりかな？」
ざっと周りを見渡すが、もう骨やら何やらが現れる事はなかった。
森からなぜ骨軍団が現れるのか、まったく分からない。
まさか、この骨達に村の人は襲われた？
「これって、神隠しじゃ無くて、誘拐じゃね？」
「え、骨達に村の人達誘拐されたの？！」
玻璃の言うとおり、それぐらいしか考えられない。
もしくは、殺されたか。
でも、この村には一人っ子一人いないし、もちろん死体なんてない。
とりあえず、どうしてこんな骨が森から？
カタっ。
変な、音がした。
なんの音か、わからずあたりを見回すが、音の出所はわからない。
「ちょっと、待って。見て！！」
雷華が、ばらばらになった骨を見て叫んだ。
「どうしたの？」
骨だった。
正確には、砕かれた骨片がばらばらになりながらもどこかに行こうと動き出したのだ。
「え？」
「ちょ、気持ち悪いんだけど。なにこれ……」

雷華が薄気味悪そうに、アルトの後ろに隠れた。
確かに、気持ち悪いことこの上ない。
「アルト、追うか？」
「……うん」
でも、骨達が村人たちの行方不明に関係していることは確実だ。
骨たちは森に向かって動いて行く。
「行こうっ！！！」
どうしてこうなったのか、きちんと調べないと。

――その数分後。

「って、張り切って言ったのまでは良かったんだけどさ……ここ、何処？」
「んー。どこだろね？」
目の前には鉄格子。後ろと両脇に灰色の壁。
「よし、ここまでの事を考えてみようか」
ここまでの事……。
アルトたちは翠螺の村に来た。
そしたら骨に襲われた。
その骨を追って森に入った。
そう、それからだ。
霧が出ていた森に入ると骨を追い続けた。どれほどたったかわからないが、そのうちになんの変哲もない場所で、突然落ちた。
どこに？　ここに。
……つまり、落とし穴にはまって落されて此処に至る。
因みに、雷華は浮いていて落ちなかったためにここには居ない。
「なんて原始的な罠にはまったんだっ！！」
「でも楽しかったよ？」
びゅーんって、落ちたの楽しかったな。
「何でアルトはそんなにノーテンキなんだっ！！」

「え、はり？」
どしたの？
「お前な……捕まったんだぞ？　檻の中だぞ？　もっと慌てろ」
「……慌てたほうがいいの？」
「いや、無理にとは言わないけど」
慌てた所で、どうにもならない。
ということで、アルトは鉄格子の前に立つと、言った。
「わかった。じゃあ、これ壊す」
「は？」
「うぬぬぬぬ！　うにぁあぁぁ！　まっがっれーっ！！」
「いや、曲がらんだろ」
玻璃に冷静につっこまれてもなお、アルトは鉄格子をつかみ奇声を発しながら曲げようと無駄な努力をしていた。
「アルト、やめとけ」
「だって、だって、……曲りそうじゃん！！」
鉄はびくともしていない。
「曲がらないから！！」
「むー……」
「むー、じゃない」
「うー、……？」
会話を止める。
不思議そうに檻の外を見た。
足音が道の果てから聞こえてきた。
「だれかいますかー？」
そう叫ぶと、その足音はゆっくりとした歩みを走りに変えたのがわかった。
現れたのは青みがかった髪にきれいな露草色の瞳の……見た事が、ない少年だ。
しかし、どこか懐かしい……？
「アルトっ？！」

「へ？」
何故かその少年はアルトを見て名を言った。
やっぱり知っている人？
でも、アルトの記憶には無い。
「な、なんで、お前…が……」
玻璃の、声。
愕然と彼を見つめていた。
「玻璃？」
「なんでお前がっ――」
「竜王様、いきなり走らないで下さいよっ！！」
後ろから、もう一人。こちらも見た事の無い青年だ。
羨ましい程身長が高い人。
彼はアルトを見て、玻璃を見ると眼を丸くした。
「玻璃？」
「テ、テイル？」
「え？　あ？　知り合い？」
あれ？　りゅうおうさまとかいう人はアルトを知ってて、アルトは知らなくて、玻璃はりゅうおうさまとている？を知っていて、ているも玻璃を知っていて……。
「あると以外はみんな知り合いっ！？」
「あ、すいません。音川の姫様ですよね、はじめまして。僕、テイル・クージスです。テイルって呼んで下さい。こっちは……いちおと、竜王様って呼んで……ください」
「なんでそんなに嫌そうに言うんだよっ！！　それと、そこの……はり？　って誰？」
「あ、音川あるとです。はじめまして」
「俺の事、無視か？！」
鉄格子を挟んであいさつし合う人々。
竜王が抗議の声を上げるが、まったく気にしないテイルにちょっと驚く。

「あ、すいません。僕達先を急ぐので、行きますね。ほら、竜王様？　行きますよ？」
「え、ちょっと、ア、アルトー！」
竜王様とか言うのが、なぜ自分の事を知っているのか分からないが、知らない人なので返事はしない。
「はいはい、さっさと行きますよ。さようならー」
去っていく二人。
テイルは竜王を引きずり先をいそ――
「って、ちょっと待て！！　テイル、お前はこの状況に何も突っ込まないのか？　てか、助けないのか？！」
「え？」
テイルは、閉じ込められている玻璃とアルトを改めて見て、気づく。
「なんで閉じ込められてるんですか？！」
「こっちが聞きたい！！」
テイルはやっぱり竜王を引きずりながら急いで戻ってきた。
「骨を追いかけたら、落ちたの」
簡単に言うと、そう言う事。
それに、玻璃は何もつっこめない。
正確には、つっこむ気力を無くしていた。
「それは……えっと、ご愁傷様って言うべきですか？」
「とにかくそういう事なんだけどさ、助けてもらえないか？」
「はい」
鉄格子を挟んで渡されたのは小さな鍵。
「これで開くと思いますよ」
「……最初から渡せよ。つか、なんでそんなもんもってんだよ」
呆れた玻璃は、礼を言いながらも文句を言う。
「ははっ。さっきちょっとぱくって……まあ、いいじゃないですか」
「いま、ぱくったとかいったよな」
「んじゃ、僕たちは行きますね」
「……おい、ぱくったとかいったよな」

「あ、ありがとうございました。えっと、くーじすさん？」
「テイルで良いですよ。では。ほら、行きますよ、竜王様」
そう言って、今度こそほんとに二人は行ってしまった。
「……」
「ちょっと良い？」
玻璃は鉄格子の前に行くと、手を出して何やらやり始める。
「……？」
ガチャリ。
「あ、開いた！」
「んじゃ、とにかく出口を探そうか？」
「うん！」
二人は灰色の迷宮に足を踏みだした。

同じく、灰色の迷宮を歩くテイルと竜王の二人組はなおも進み続けて、分かれ道に出た。
「……竜王様って音川の姫様と知り合いだったんですね。あ、どっちに曲がるんですか？」
「まぁ……本人解ってなかったけど。えーっと、左」
「その姿じゃ、わからないですよ」
「だよなー」
先ほどのアルトと玻璃の話題に盛り上がりながらも、歩く。
右も左も灰色の道を歩き続ける。
時々扉などがあるが、先頭を歩く竜王は気にする事も無く進む。
「玻璃だっけ？　あいつ、コイツと仲悪いの？」
自分を指しながらテイルに問う。
「え？　さぁ？　でも、玻璃が星原にいたのはマコトの来る前ですから、知らないはずなんですけど……。まあ、マコトを一番知っているのは陸夜さんですから、そちらに聞いてください」
「ふーん。……面倒事になりそうだな」

「……そうですか？」
少しの沈黙。
「あ、ここか？」
一番奥のつき当たりにあった扉の前で竜王とテイルは立ち止った。

霧に包まれた森に、独りで彷徨う精霊が一人。
「あわわわわっ。アルト？　アルト？？　アールート――！？」
少女を心配する精霊は一人残された雷華であった。
先ほどまでアルトが立っていたはずの地面に向かって呼びかけているが、もちろん答える声はない。
「うううぅ。アルトー……。……クソ。此処ノ神は何やっていやがるんだ」
それまでとは打って変わって冷酷な表情。
それはアルトの前では、けして見せないもう一つの姿。
いらいらと舌打ちすると、周りを確認する。
誰もいない。
そう、ヒトも雷華と同族の精霊も。
「約束は……守らないと……」
自分に言い聞かせるかのようにそうつぶやくと、雷華はサッと姿を消してしまった。

００―０１―０３　常盤の地、神隠しの森

3

「ちょっと、これじゃないですか？」
テイルの声が物置のような部屋に響く。
先ほど見つけた部屋の中を探索していると置いてあったのだ。
それは黒いトランクだった。厳重に封をしてある事がよくわかる。
部屋にある物はみな、ほこりをかぶっているが、このトランクはごく最近おかれたのかきれいなままだった。
「……あぁ。これだ」
これが、竜王から奪われた大切なモノ。
テイルからトランクを受け取ると、大事そうに抱えた。
「……マコトを返してくれますね？」
「ああ」
そんな会話をしている時だった。
轟音が響いた。
「えっ？」
突然の轟音にテイルは止まってしまった。
「アルトっ？！」
そう叫んだ途端、竜王は止めようとしたテイルの手を振り払って走り出した。
「ちょっと！約束がちがっ！！」
少し遅れてテイルが走りながら叫ぶ。
「そんな事より、アルトのほうが大事だっ！！」
その少し前を走る竜王。
先ほどの音を頼りに竜王は走った。

幾つもの道を曲がり、灰色の迷宮を走り続ける。

「はりっ！」
人気も生活感も無い廊下に、アルトの声が響いた。
「なんだ？」
「なんか前の道がわかれてるっ！！」
「うん。見ればわかる」
「どっち行きますか？！」
何故かワクワクと輝く瞳で玻璃を見つめるアルト。
理由は簡単。
目の前に広がる不思議な灰色の石のような壁。
ただ、コンクリートで出来ているだけなのだが、大和国から外に出た事の無いアルトにとっては珍しい場所である。
玻璃は少し悩むと、右を見た。
「こっちに行こうか」
「うん」
奇しくもその道は、竜王とテイルが言った道と反対の道だった。
「そう言えばさ、アルトってあの……竜王さん？　と知り合いなんか？」
歩きつつ、玻璃はアルトに問いかけた。
「さぁ？」
「？」
一体、彼は誰なのだろう。
あっちが知っているという事は、こっちが忘れてしまったのかもしれない。
「それ言ったらはりのほうもあの二人さんと知り合いなんだよね？」

「まあ、な」
玻璃は、なぜか視線をそらす。
お互いに歯切れの悪い会話を交わす。
二人の足音がこだまする。
それ以外の音は聞こえない。
そんな中で居心地の悪い沈黙。
「……テイルのほうは同じ仕事をしてたから、知り合いなんだけどさ、あの竜王さまとかいうのは……人違いだったみたいだ」
最初に沈黙を破ったのは玻璃だった。
そういえば、玻璃が以前何やってたのか知らない。
数年前に、流留歌にやってきた旅人。
それが、なんだかんだで友達になった。
それ以来、玻璃は流留歌に住んでいる。
「そうなんだ。あるとはよくわかんない。名前呼んできたから知っている人なのかもしれないと思うけど、あるとは……」
知らない。
知らないはずだ……でも、何故かあの瞳が気になる。
あの瞳は……？
「どうした？」
「なんでもない」
玻璃の声にかぶりを振ると、また歩き続けた。

それからも歩き続けると、時折道が分かれて、その道によってはつき当たりに行きついてしまったりした。
その時の道にあった部屋には全部入って調べたが、誰もいない。
古びた布や血のついた鎖、誰かが監禁されていたかのような部屋もあれば、鮮やかな緑の液体の入った水槽、不気味な器具の置かれた実験室のような部屋が放置されているだけだった。
「誰もいないね……」
何度目かわからない扉を開くと、アルトは疲れたように言った

「そうだな」
そして、また何かの部屋の扉を見つける。
「あ、あると開けるね」
少し小走りで扉の前に行くと、パッと開いてパッと閉めた。
「……」
「え、どうした？」
「次いこっか」
「いやいや、なんの部屋だったのここ？」
玻璃が扉を開けようとする。
「だだだだ、だめだよ！なんかほねがいっぱいでだからだめっすよ！！？」
「アルト、いろいろ混乱してる」
「だ、だめ！　開けちゃだめ！！」
玻璃はアルトの制止も聞かずに、扉を開けた。
と、そこには……。
「ようこそ、お客人」
白一色の部屋の中で男が一人、村で襲って来たモノと同じ骨に囲まれて座っていた。
白衣に肩眼鏡をかけた男。
その男はこちらを見て笑っていた。
「あなたは……？！」
「君は、君たちはどうしてここに来たのかな？」
「まさか骨好きなのっ？！」
「いや、突っ込む所そこじゃないってっ！！」
「ははは、いや、骨が好きな訳じゃないよ」
「普通に返してきたよ、この人」
玻璃は額に手を当て苦しそうに呟いた。
「で、何故此処に来たんだい？」
男の言葉で玻璃は気を引き締めた。
そしてじっと彼を見る。

これと言ってそばにいる骨以外は気にするような事の無い男だ。
ただし、目が笑っていない。
ずっと笑っていると言うのに、目は笑っていない。
そんな事を気付かず、アルトは骨を凝視しながら言った。
「なんか、森の中を歩いていたらここにおちたの」
「ほう……」
「お兄さんは？」
「……ここに住んでいるんだよ」
一瞬、虚を突かれたように詰まってから男は返した。
「あ、あるとはね、音川あるとって言います」
「ウィルベルだ」
「こっちははりだよ。よろしくお願いします」
「それは……ちょっと無理かな？」
くすくす笑って彼は続ける。
「だって、君たちここで死ぬんだもん」
その途端、骨が叫び声を上げ出した。
そして、アルト達に襲おうと飛びかかり、轟音を立てて壁を壊した。

「アルトっ！！！」
それまで話さず観察に徹していた玻璃はやはりアルトを庇うために前に出ると、剣を抜いて飛んだ破片からアルトを庇った。
「ははっ。アルトとハリだね、コイツらを壊したのは。……でも、なんで檻から出られたのかなぁ？　どうしてだろうねぇ？」
はは。あはははっ。
狂ったように笑い続ける。
ウィルベルが指示を出した様子はないが、骨達が動き始める。
「でも、なんでもいいや。もっと大事なことがある。君たちはよみがえれるかな？」
「よみがえる？」
「……貴様っ、まさかっ！！」

「なるほどね、だから『力』が要り用だった訳か」

「ほえ??」

聞き覚えのある声が聞こえた。

「りゅうおうさん?」

振り返れば、竜王とテイルが走ってくる所だった。

「おやおや、きょうはいろんなモノたちが来るようで」

その言葉が終らないうちに、壁に取り付けられていたランプが赤く光り、音が響いた。

００―０１―０４　常盤の地、神隠しの森

４

基本、精霊とは人間にかかわる事を嫌がる。
何故って？
まぁ、精霊にとって戦争やら魔術汚染やら馬鹿みたいに繰り返す人間なんて其処に居るだけでも邪魔だから。
それに、人と精霊は生きる時間も世界も感情さえも違う。
中には人間撲滅なんて始めようとした精霊もいた、が、殆どの精霊は人間を無視する。
人間が精霊を視る事が出来ない事が多いのもあるが、それが一番良いと精霊達を束ねる大精霊が推奨したからだ。
だが、物事には例外が居るものである。中には積極的に人間とコンタクトをとる精霊が居る。そういう精霊はたいてい以前の大戦争を知らない若い精霊の事が多い。
と、話が少し離れてしまった気がするが、とにかく精霊は人間をあまりよろしくは思っていない。
それは私も例外ではなく、今回の神隠しだって別にこっちに影響ないし、良いんじゃない？　とか心の中で呟きながら此処まで来た。
でも、この状況は極めてよろしくない。
洒落にならないほどヤバイ。
まさか、アルトが敵陣ど真ん中で落下するなんて……。
アルトだけは……。
「あー、もうっ！　入口どこなの！！」
その声に反応したのか、雷華の前に光が現れた。
よくいる蛍のような少し弱く淡い光。

「……まさか」
雷華を誘うように少し前に進む。
罠かもしれない。
なんて考えながらも雷華はその光について行く。
時折弱々しく点滅を繰り返しながらも、その光は一定の距離を置いて進んでいった。
光に導かれて雷華は洞窟のような場所まで来ていた。
誰かに見つからないようにか、草木や魔法で巧妙に隠している。
地下に道が続いている洞窟は、人の手が加えられていた。
奥の方はコンクリートで出来ている。
光は止まらず、そのまま洞窟を進んでいく。
雷華も黙ってその後ろをついて行く。
大和国では珍しいコンクリートの壁、ありえない建築技術。
……まさか、あの国が関わっている？
未だ木材家屋が主流で和風建築であるこの国で、こんな技術は輸入でもしない限りは無い。
アルトは今頃、初めてみるモノに興奮しているところだろう。
その様子があんまりにも簡単に想像できてしまってちょっと笑うが、すぐに気を引き締める。
光がある部屋の前で止まったのだ。
光はそのまま進み、扉を通りぬけて向こう側へ。
雷華にそんな真似が出来る訳もなく、小さい体で数分かけて扉を開けた。
「！？」
其処に在ったのは鉄の檻。そして、その檻によって閉じ込められた人々だった。
十中八九翠螺の村人だろう。だが、十数人ほどしかいない。
唯人の瞳には精霊や妖精の姿が映らない。彼らもその例にもれず、突然開いたように見えた扉に驚き、おびえていた。
精霊の姿は、見える者と見えない者がいる。

そして、見えない者の方が圧倒的に多い。
此処まで導いた光は既に消えていた。
「……助けろって事？」
鍵を探して辺りを見ると、部屋の管理パネルが壁に備え付けられていた。
どうやら暗号を入力しなければこの檻は開かないようになっているようだ。
だが、雷華には関係無い。なにしろ雷華は、
「雷の精霊相手に電動式なんて意味無い」
そっと微弱な電気をパネルに流すと、数秒で檻が開いた。
村人たちは驚きながらも用心深く外に出てくる。
罠じゃないかとあたりを見ているが、そんな事をしても無駄だ。
人々は、迷いながらも部屋から出て先ほど雷華が通って来た道を遡って行った。
「……これで満足？　さっさと姿を見せなさいよ、常盤の神！！」
姿を消したまま、部屋で叫ぶ。

ありがとう。私は、隣にいるわ……

ほんの一瞬迷ったが、すぐに隣の部屋に行く。
扉を開けると多くの機械の間に緑の女が一人、居た。
いや、神だ。常盤の土地神。
「……なにこれ」
その神は、機械の中に囚われていた。
神を捉える楔……彼女は神だ。神の中でも力の小さな土地神と言えど、神である。
その神を、人間は科学で捉え、力を奪い、地に貶めた。

そんな顔しないで……。まさか、貴女が助けてくれるなんて、そちらの方が驚きだわ。雷の姫。

「な、なにを悠長に言っているの！！」
どうすればいい？
混乱した頭で辺りを見渡して、先ほどと同じように雷を使って機会を狂わせればいいのに遅れて気付いて、すぐに雷を発した。
貴女は変わったわね。でも……ありがとう。このまま廊下を出て右に進めば、貴女の探している者達が居る筈よ
「あ、ありがとう……でも、なぜ？　なぜあんたが……」
神が、とらわれたの？
機械が雷華の雷を受けて壊れていく。
……人間はすごいわ。たやすく私達の想像を超えてしまう。私を捉えたのは不死の男。黄泉還りの術を完成させるために私の力を欲し、同時に実験体として翠螺の村人達を捉えた。あなた達が来なければ、皆殺されていたわ。ありがとう。
「……」
いつの間にか赤いランプがつき、声が響く。
さあ、あなたを待っているヒトの元に、行ってあげなさい
「……わかった」
大和に無い技術。
囚われた土地神。
黄泉還りの禁術。
何かが、起ころうとしている。
これは序章に過ぎない。

雷華はただ、アルトの元に向かうしか出来なかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3813ba/

神騙り

2012年1月14日14時46分発行